

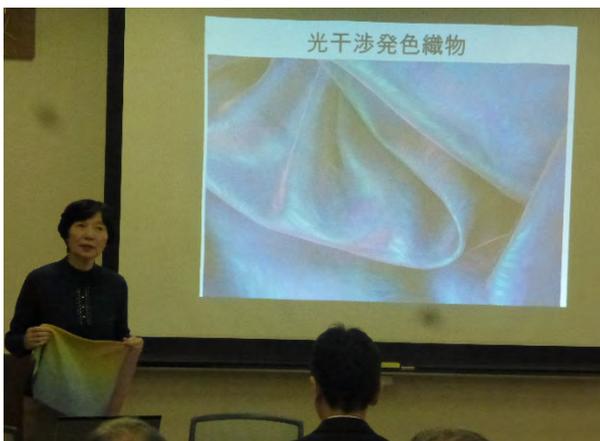
公益財団法人衣笠繊維研究所「学術講演会」に出席して

繊維化学科 S47 院卒 中村成臣

旧繊維学部養蚕科卒業の先輩たちが中心になり昭和 25 年創設し、現在は文部科学省主管の公益法人になっている衣笠繊維研究所の存在は、以前より耳にしていたのですが、その学術講演会（研究発表会）に出席することは、今回が初めてです。そのきっかけは、同級の根岸（旧姓関根）氏が講演することを知ったことと、今年から衣笠同窓会の副会長に就き、その遺産の活用を考えねばならない立場になったことも、ありました。

時は 2018 年盛秋 10 月 20 日。会場は、京都中京区丸太町通りにある京都アスニー（京都市総合学習センター）です。代表理事養蚕科 S42 卒の古澤先生をはじめ 50 数名ほどの聴衆で教室はいっぱいでした。92 歳になる長老高橋重三先生や多数の千花会メンバーの方々も出席なされておられました。想像以上の盛況さに、ややびっくりでした。

講演は、最初、母校技術専門員の島袋順二氏による「家蚕人工飼育の生物生産における応用研究」で始まりました。内容は、開学（京都蚕糸専門学校）以来続いている周年型蚕糸生産システムにおいて、圃場で栽培した繊維作物ケナフを粉末加工した人工飼料の開発やタイ北部の熱帯性蚕を使った日本桑と人工飼料の繭質と糸室への影響研究の実際を紹介されました。また、蚕の主要な病原体であるカイコサイボウイルスを包むタンパク質結晶の多角体が顕著な安定性を示すことから、その特性を応用した研究発表もなされました。ただ、それらの社会的貢献への言及がなかったことは、とくに、絹製品は東洋の特産、しかも日本は、いや、母校は、その技術に関しては長い伝統的な蓄積をもっていることを考えると、やや残念な思いがしました。



次いで、現在、当公益法人の理事でもあり、2000 年に母校で博士号を取得された関根氏が「光干渉発色織物について」と題して、織物に表面加工してえられる光干渉発色特性を、理論的仕組みと結果の現物を示した説明をなされました。一時、カメレオン繊維として話題になったことがありましたが、製造技術のむつかしさとそのコスト高のため、商品化への展開は芳しくなかったようです。すでに、特許も切れていることから、活用への技術開発を見直してもいいのではとの気がしました。

帰路、この学術講演会やその主催団体衣笠繊維研究所に対して、同窓として、どのようなお手伝いができるか、想いを巡らせながら、JR 二条駅に歩を速めました。

2018.10.23 記